2024年10月20日 収穫感謝礼拝（聖霊降臨節 第23主日礼拝）メッセージ

「命によりそう」　　牛田匡牧師

聖書 エレミヤ書 29章 1，4－14 節

今日は収穫感謝礼拝です。「残暑が厳しい」と言い続けているうちに、気付くと早くも 10 月も下旬になりました。あちこちの町で秋祭りが行われています。まさに秋の収穫をお祝いする季節です。私たちは食べること無しには生きていくことは出来ません。そして、大地や海から生み出される食べ物は、元を辿れば自分たちが造り出したものではなく、人間の力を越えた「自然の恵み」に他なりませんから、昔から人々はいつも大自然への感謝を心に覚えて来たのだと思います。だからこそ毎年、この収穫の季節に、収穫物を神様に献げて感謝し、またそれを皆で分かち合ってお祝いする収穫感謝祭が、世界各地で行われて来ているのでしょう。

今日、私たちはこの礼拝の後、ここに献げられたお野菜などを、釜ヶ崎にお届けに行きます。また併せて、毎月行っている「おにぎり支援」も行いますので、それらを一緒にお届けする予定です。これまで、炊き出しの列に並ばれる方々に、おにぎりをお渡しさせて頂いていた西成警察署裏の「四角公園」が、今年の夏から改修工事のために閉鎖されてしまったため、炊き出しが始まるまでの時間、人々が待つ場所がなくなってしまいました。日陰を作ってくれていた藤棚も撤去されてしまったこともあり、7 月 8 月 9 月と、猛烈な酷暑が続いていたためか、おにぎりを受け取りに来られる方々の人数が、ぐんと少なくなっていました。ですが、幾分か涼しくなった先月には、また大勢の方々が来られて、おにぎりをお一人一つずつしかお渡しすることが出来ないような状況でした。夏の米不足に続いて、今度は新米の価格が随分と値上がりしましたので、どうしたものかと思って困っていましたら、お米を献品して下さる方もおられて、本当にありがたく、用いさせて頂いています。

そんな釜ヶ崎で、先日、支援活動をされている方から、次のような話を伺いました。その方は、活動の中で、釜ヶ崎に初めて来られた学生さんたちに、寄せ場について紹介することが時々あるそうです。そして「釜ヶ崎のすぐ隣には、あべのハルカスや星野リゾートなど、華やかな繁華街が広がっていますが、そのような都市の繁栄の裏には、使い捨てられた労働力があり、人権が顧みられない政策がある。天候によって仕事があったり無かったり、一日ごとに雇用されては解雇され、クビを切られるという不安定な生活、貧困を生み出すような仕組み、社会構造が、社会の華やかさの裏側にはある。それが釜ヶ崎に、目に見える形で表れている」というようなことを、学生さんたちに伝えられるそうです。ですが、時代の流れの中で、エ

事現場のあり方も変化し、寄せ場の機能も縮小し、今では釜ヶ崎はすっかり高齢化して、貧困と生活保護、福祉の町になっています。

今の 10 代、20 代などの若い学生さんたちに、釜ヶ崎の方々の現状を見てもらい、路上におられる方々や、炊き出しの列に並ばれる方々と接してもらうと、生活に困窮されている方々に対して、「何かをしないといけない」という思いは、分かってもらえるそうですが、貧困を生み出している社会構造、社会悪については、なかなか話が分かってもらえないように感じている、とのことでした。それは何故でしょうか。そのことを考えてみた時に、恐らくこれまでの「失われた 30 年」の間に、社会全体が貧しくなり続けてしまったために、今の 10 代や 20 代の方々は、「自分たちが誰かの足を知らない間に踏み付けてしまっている」ということに気付く以前に、「自分たち自身が生まれた時から、ずっと他人から踏み付けられ続けて来ている。豊かになった経験なんてないし、将来に対して明るい希望なんて持ったことが無い」ということがあるのではないかと思いました。

かつては「日雇い労働」と言って、一日単位で雇用されては解雇されるという仕組みがありましたが、今ではいわゆる「手配師」も介さずに、手元にあるスマートフォン一つで、2 時間や 3 時間などのわずか数時間単位で、仕事に派遣される時代になりました。聞いた話ですが、都心部のレストランでは、店長ら数人の社員の他は、毎日「初めまして」で、数時間だけ勤務するパートタイマーたちによって賄われているとのことでした。「フリーランス」と言うと、聞こえは良いかもしれませんが、組織によっても守られず、同労者たち同士で横に連帯する場所も機会もなく、それぞれの人がバラバラにされてしまっている時代になっています。その意味では、寄せ場が機能していた時代よりも、さらに社会構造は悪化し、社会悪が見えにくく、個人化されていっている時代になった、と言えるかもしれません。

話は変りますが、来年 2025 年には、日本の総人口のうち 5 人に 1 人、約 2200 万人が 75 歳以上になると言われています。また年間にお亡くなりになる方々の人数は、150 万人以上と年々増え続けています。そのために全国の火葬場が予約でいっぱいで、火葬が追い付いておらず、何日間も待機せざるをえないような状況だとも言われています。そのような中、新しく生まれて来る子どもたちの人数は、年々減り続けており、今では年間 80 万人を下回っています。これから先の時代は、人口が減少していくだけではなく、集落や地域、さらには自治体自身が、存続できなくなって消滅していく所も出て来る、増えて来ると予想されています。そのようなことを考えると、これから将来については何だか暗い気持ちになって来ます。

バブル崩壊後の「失われた 30 年」が、まだ「10 年」とか「20 年」と言われていた頃、経済格差が次第に拡がっていく中で、「経済格差」よりも、もっと深刻なのは将来に対して希望を持てる人と、絶望しか持てない人との「希望格差」だという論評（山田昌弘 2004）がありました。その頃は「なるほど、鋭い視点だな」と思っていましたが、今ではその指摘の通り、経済格差と併せて希望格差がどんどん拡大して来ています。これだけ、将来に対して希望が持ちにくい社会、時代の中で、私たちはどこに目を注ぎ、どこを見上げ、目指していけばよいのでしょうか。そのことを、聖書の言葉に尋ねてみたいと思います。

今回の聖書のお話は、ヘブライ語聖書の中から、預言者エレミヤのお話でした。エレミヤは紀元前 7 世紀から 6 世紀にかけて活動した預言者です。その時代、古代イスラエル王国は、南北2つに分裂していて、それぞれにアッシリアの属国となっていました。しかし、エレミヤが登場するおよそ 100 年前に、北イスラエル王国は、隣国エジプトを頼って、宗主国であったアッシリアへの貢ぎ物を拒んだことから、アッシリアによって滅ぼされてしまいました。その後、アッシリアに代わってバビロニアが勢力を伸ばして来て、エジプトや南ユダ王国へと迫って来ました。そのような時代の大きな変化の狭間で、強大な軍事力を持つ大国に囲まれながら、どこに行けば自分たちの国は生き残ることが出来るのか、南ユダ王国の人々は右往左往していました。

実際の歴史としては、バビロニアがエジプトを征服し、南ユダ王国もバビロニアの属国となり、数回にわたって多くの人々がバビロンに移送されていく「バビロン捕囚」へと至りました。バビロニアに対して服従するか、抵抗するかが、ユダの人々にとっての大問題でしたが、エレミヤはバビロニアに服従すべしと主張しました。一方で、その逆を主張する偽預言者たちの主張もありました。しかし、時のヨヤキム王は、バビロニアに反旗を翻すことを決断し、そのためにバビロニアの王ネブカドネツァルは直ちに軍を送り、エルサレムは包囲されてしまいました。その包囲の中でヨヤキム王は死に、その子ヨヤキンが王位を継ぎますが、即位からわずか 3 か月後にバビロニア軍に侵入されて、捕虜として数千人の民たちと共にバビロニアに連れて行かれました（第 1 回捕囚、BCE598 年。エレミヤ 52：28、列王記下 24：14）。

遠く異国の地に捕虜として、連行されて行った同胞の人々に対して、エレミヤが書き送った手紙が、今回の聖書の言葉でした。先の見通せない絶望しかないような状況の中では、自暴自棄になったり、「もう生きている意味がない」「早く楽にな

りたい」と言って、自ら命を絶ったりすることは、昔も今も、どこでも十分にあり得ることでした。しかし、エレミヤは飽くまでも絶望してしまうのではなく、将来の回復を信じ、堅実な生活をするようにと、同胞たちを励ましました。5 節です。

> 「5 家を建てて住み、果樹園を造って、その実を食べなさい。6 妻をめとって息子、娘をもうけ、息子には妻を迎え、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そこで増えよ。減ってはならない。7 私が、あなたがたを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があってこそ、あなたがたにも平安があるのだから。」

もしも苦難が短期間なのであれば、いつでも祖国に帰ることが出来るように、家を建てたり、田畑を耕したり、果樹を植えて果樹園を作ったりするのは、無駄なことです。しかし、エレミヤは預言しました。苦難は長く、70 年に亘る、と……。10 節です。

> 「10 主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたらすぐに、私はあなたがたを顧みる。あなたがたをこの場所に帰らせるという私の恵みの約束を果たす。11 あなたがたのために立てた計画は、私がよく知っている――主の仰せ。それはあなたがたに将来と希望を与える平和の計画であって、災いの計画ではない。」

70 年というと、当時では 2 世代 3 世代でしょうか。捕囚民として当初、連れて来られた第1世代の人たちは祖国に戻ることは出来ないかもしれない。けれども、その後の子孫たちは、必ず帰ることが出来る。「あなたがたのために立てた計画は、～あなたがたに将来と希望を与える平和の計画であって、災いの計画ではない」……。このエレミヤの手紙、預言の言葉によって、捕囚の民たちはどれだけ慰められ、励まされたでしょうか。

先が見通せず、絶望しかないように思えない時、それでも自暴自棄になってしまうのではなく、命を投げ出し、棄権してしまうのではなく、今置かれている場所で、今置かれている場所に平和を求めて、平和を創り出していくこと。田畑を作って日毎の糧を生産していくこと、家族や仲間たちと共に生活を造り上げていくこと。それらは即ち諦めてしまうのではなく、飽くまでも目の前にある一つ一つの命に、大切に寄り添っていくことに他ならないのだと思います。

豊かな秋の実りという、命の源である神様の恵みを実感する季節にあって、神様が備えて下さっている平和の計画に信頼して、私たちはここから、自分の命も、他人の命も、一つ一つの命に寄り添い、命を大切にする歩みへと導かれて行きます。